

# 図書だより

〈第28号〉  
 平成5年2月19日  
 呉工業高等専門学校  
 図書委員会



呉市立美術館 (田邊達雄 画)

## 目 次

〔表紙〕	.....	1
〔読書感想文〕		
文学	「アンネの日記」を読んで (フランク・A著) .....	M1 松本佳之.....2
	「自動起床装置」 辺見庸著 (第105回芥川賞受賞作品) .....	E1 村上雅樹.....3
	「本の話」を読んで (由起しげ子著) (第21回芥川賞受賞作品) ...	C1 中村義孝.....3
	「中国孤児」を読んで (読売新聞社編) .....	A1 花上磨弥.....4
歴史	「氷川清話」 (勝海舟著) .....	M2 赤野健一.....5
	「名僧の言葉を鑑に」を読んで (由木義文著) .....	M2 樫野泰司.....5
	「豊田秀長」を読んで (堺屋太一著) .....	E2 竹内一記.....6
	「ナチス・ドキュメント」を読んで (ワルター・ホーファー著) ...	E2 長谷川和彦.....7
政経	「クジャクになった日本人」 (猿谷要著) .....	C3 南條英夫.....7
	「NHKスペシャル日米の衝突」 (NHK取材班編) .....	C3 三島裕也.....8
	「検証ニッポンのODA」 (村井吉敬編著) .....	A3 土井友恵.....9
	「広島が消えた日-被爆軍医の証言-」 (肥田舜太郎著) .....	A3 三浦紀子.....9
〔随想・読書雑感〕		
	「江夏の21球」 .....	M5 東川 正.....10
	「ターニング・ポイント」 .....	E4 中本昭雄.....11
〔新任教職員随想〕		
	「高専時代の自分を振り返って」 .....	機械工学科 中迫正一.....12
	「職場を通しての女性感」 .....	学生課長 永井康夫.....13
〔海外だより〕	「遙かなるスコットランドでの思い出」 .....	一般科目 笠松義隆.....14
〔留学生手記〕	「スリランカを出て今思うこと」 .....	E3 チンタカ グナティラカ.....16
〔私の推薦する本〕		
	木村尚三郎 [ほか] 著「名言の内側」日本経済新聞社 .....	機械工学科 岩本英久.....17
	C.A. デソー, E.S. クウ共著「電気回路論入門 上, 下」	
	ブレイン図書出版 .....	電気工学科 綿井伸爾.....17
	住井すゑ著「橋のない川 第7部」新潮社 .....	建築学科 實成憲二.....18
〔新着図書30選〕	.....	18
〔科学・数学パズル, 土曜日開館に関するアンケート結果, お知らせ〕	.....	21
〔編集後記〕	.....	24
	図書館長補 池上廉平.....24	

## 読書感想文

## 文学

## 「アンネの日記」

(アンネ・フランク 著)

M1 松本 佳之

1944年8月1日で、この日記は突然終わってしまっているが、今、またページをめくれば、あの日の続きが書いてあるように思えてならない。

それほどこの日記には、あのころの15歳の少女の毎日が、生き生きと、まるでビデオテープを見るように克明に記されてあったからだ。

それが突然、全く暴力的に奪われてしまうとは、どんなにか恐ろしく、悲しく惨めだったことだろう。そう思いながら、8月1日の日記を読むと、アンネが自分を冷徹なまでに分析していることが、まるでこれだけは書き残して自分のことをわかってほしいと叫んでいるようで、胸を打った。

アンネの鋭い自己洞察、そして理想と現実の世界のはざまで揺れ続けながらも、しっかりと大人達を観察しつづけた、あふれるばかりの豊かな感性に、僕は心底感動した。

あれから40年以上を経た今日、僕達は自分達の意味ではないにしても、戦争を歴史の中に埋めてしまいがちだ。特にこの日本は、平和で人々の生活も豊かだと思われているせいか、なおさらそうなりがちなのだ。

平和と豊かさという、アンネ達がのどから手が出る程欲しかったものを、今の僕達は両手にあまるほど持っているというのに、何故か、アンネのような豊かな感性は持っていないようだ。このことが、大人と若者の間に高い垣根を作っているのかもしれない。だからアンネが、大人達と世界のことや戦争のことを真剣に語り合う姿には衝撃を受けた。

僕は戦争を知らない世代だ。でも、戦争の愚かしさはわかるつもりだ。

戦争の愚かしさは、人が人を殺すことに尽きる。そして、愚かしさが気狂いじみていることには、殺すという

意識もすでに奪われてしまうことにある。そこにはもはや人の理性はないのだ。

人間は、とてつもない大きな渦に巻き込まれたら、もう、渦の中に巻き込まれていることさえわからなくなり、なす術もなく、渦の巻く方向へと巻き込まれていくものなのだろうか。戦争という、とてつもなく大きな渦に巻き込まれ続けた長い歴史を振り返ってみると、そんな気がしてくる。

日本も、何度も大きな戦争をくり返した国のひとつだ。日独伊同盟を結んで、アンネたちを不幸におとし入れた国の片棒をかついだこともある。だから、僕はこの日記を読んでいて、なんだかアンネに対して、申しわけない気持ちになった。

今の日本は、PKOとかで憲法の枠を少しずつ広げているように思う。このままでは、昔に逆戻りしてしまいそうな気がする。そして、中東の辺りかどこかでは、今も紛争かなにかが起きているらしい。

人間はだから恐ろしいのだ。昔のことを反省せずに、同じ事を繰り返そうとしているからだ。どんなことをしても、あのような時代の再来だけは絶対に防がなければならない。人のそういう弱さと愚かさを知ったうえで、防がなければいけないだろう。

僕が生まれる以前に書かれたこのアンネの日記は、今でも大勢の人々に読みつがれ、僕と似たような感動を与え続けているのだろう。僕はこのアンネの日記と、今の自分の気持ちを、大人になっても忘れずにいようと思う。



## 「自動起床装置」

(第105回芥川賞受賞作品)

(辺見 庸 著)

## E 1 村上 雅樹

僕はこの作品を読んで人間本来の姿と、人間がつくり出した機械のありかたについて、考えさせられたような気がします。この作品では「起床」という行動を通してその「人間本来の姿と機械のありかた」を訴えていました。

国語辞典では「起床」というのは、(ねどこから起き出ること)としか書かれていませんでした。僕もそのとおりだと思いましたが、この作品の中で筆者である辺見さんは、それだけではなく「起床」というのは、生活の中で最も大切な行動であると述べていました。なぜなら「起床」というのは、生活の出発点であるからです。この「起床」のしかたでその日その日の行動や気分が、ほぼ決定していくといっても良いと思います。

僕は毎日、学校へ行く時には、朝の5時30分に起きるようにしています。そのために僕は、枕もとに2個の目覚し時計を用意し、その音で起床しています。それがあたりまえだと思っています。でも、この作品で言っている「起床」という行動の大切さから、いつもの僕の起床を考えてみると、決してさわやかに起床していないし、自然に起床もしていません。さきほど述べたように「起床」がその日の行動や気分を決めているのならば、快適な生活をしていないなと思います。でも実際の生活の中でそのようなことを感じることはありません。それは目覚し時計の音で起きることが普通と考えられているからです。

人間は本来、目覚し時計などの機械がない生活を送っていたと思うのですが、そのころはきっと自由に自然に快適に起床していたんだろうなと思います。そして快適な1日を過ごしていたのだと思います。現代は機械に管理され、時計の派手なベルの音で不自然に、いやな気分ですべて起きています。そのような事から不快な生活を送っている—とはいえないそれが現代なのだと思います。目覚し時計のベルで不自然で不快でも起床しなければいけないのです。このような社会を作ったのは、人間です。いまの社会では機械にしばられて生活しなければいけないのです。これはもうしかたないのです。人間と機械が共存しているのが本当にどうし

ようもないのです。でもしかたないけど「起床」だけはなんとかしてほしいなと僕はこの作品を読んでいくうちに本当に思ってきました。人間が起こすにしても機械が起こすにしても、起こす者は、とにかく、起こされる者の気持ちを考えなくてはいけないなと思いました。とても難しいことだと思います。

しかし、ちょっとした生活の一部、「起床」という行動のありかたというのを変えるだけで、もしその生活自体が、快適になるのなら、難しいけど、考えていきたいと思うし、ぜひ実現させてみたいと思います。でも今のところは目覚し時計で起床するしかないので、僕はみずから快適に起床できるように、気持ちの上で、気分悪く起床しても、それを実生活の中で忘れるぐらい、一生懸命、快適に過ごし、快適に過ごせるから、快適に起床できるものとなるかもしれないので「人間本来の姿」や「起床」の大切さを考えながら、一生懸命に生活を楽しんでいこうと思います。

## 「本の話」(第21回芥川賞受賞作品)

(由起 しげ子 著)

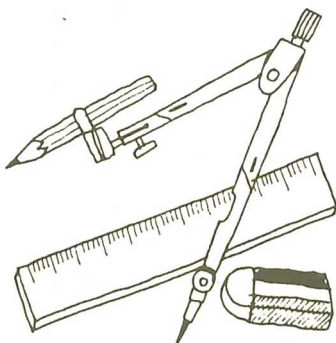
## C 1 中村 義孝

ぼくがよんだ「本の話」とは、昭和24年10月発行、文藝春秋新社刊を底本として、表記を新字体、現代仮名遣いに改めたものだったので、よみやすかった。

この話は、由起しげ子さんという人がかいた話である。この話は実際にあった話で、ノンフィクションである。戦後間もない頃の話である。その頃は物がとぼしく、もちろん金のないピンボーな日本だった。この作者の義理の兄である白石淳之介は、病気になったその年の寒い2月1日になくなくなる。58歳だった。病名は喉頭結核であったが、事実は栄養失調死だった。それは、この作者の姉であり、白石淳之介の妻であった人が病んでしまったので、元気にさせようと自分のことなどそっちのけで、妻のかん病をしたからだった。人間はみんな自分がかわいいため、淳之介の様な行動をとるのは難しいと思う。自分をかばってしまう。淳之介はえらいと思う。この作者は、心の中でたくさん自分と戦った。姉をたすけようとする自分、姉に嫌悪をいだけ自分、そんなことを思う自分をしかる自分が心にあった。病気で入院している姉さんを養うため、イカをうったり、だしじゃこをうったりいろいろした。

その中で、この話の中心となっているのは、亡くなった義兄さんの残していった保険会社の本を売るということだった。この本は、義兄さんが残していった大切な物で、なるべく義兄さんが希望するような所に売ろうときめていました。それがだいたいかなって、売る先に本のリストをおくるため手紙をかいていた時、「本」という字を書くたびに涙がポロポロでた作者は、きちんとした売り先が決まって本当にうれしいのだと思いました。広田というおてつだいさんの大学生を夕食に招いた時、彼のオーバーが「泥棒」にぬすまれていた。よわったこの作者は、オーバーをかうために自分の家の洋服ダンスを売ろうと建具屋さんの「権さん」を訪ねた。そしてそのできごと全部話すと、「じゃあ、さし当たってあしたから着るオーバーがありゃいいんでしょ。」といて、自分の持っていた将校用のオーバーをくれた。作者は、とてもうれしかっただろうなと思いました。自分のオーバーをポンとだしてあげるなんて、とても心の広い人なんだなと感動しました。貧乏だったこの時代にも、心のすきんだしたたかな人ばかりではなかったのだなあと思った。

この本を読んでいると、人と人とのつながりがどんなに大切か、またどれほど偶然的な出会いをするか考えさせられる。この作者は、童話をたのまれてよく書く。その時、実在している人の名前をよく使う。例えば、「気のいい男」の所の名前に「権さん」だとか、自分はこれを見たとき、権さんがやさしくしてくれることが本当にうれしかったんだなあと思いました。文章の後の方の結末の意味がつかみにくかった。ぼくは、芥川賞を受賞した作品を読んだのは、これが初めてだったが、中々おもしろいのでこれからすこしずつ読んでいこうと思います。



## 「中国孤児」

(読売新聞大阪本社編)

A 1 花上 磨弥

「戦争」、この地上のどこか1ヶ所でも、それがあってはならないことなのに、毎日、目にする新聞には戦争やそれに関連したニュースが多い。あまりにも、日常茶飯時のことなので、そのようなニュースにも無感覚になりつつある。また、国家レベルのことでもあるので、私のような小さな人間には何の力もなく、どうしようもできないことだと思うと余計にかけ離れたことのように思います。

時々、新聞の片隅に載っている被爆者証人探しの記事も、果たして47年も経った今、みつかるのだろうかと気にとめることもなく見過ごしてきました。そうした中で「中国孤児・新聞記者が語りつぐ戦争」という本を読んで、戦争の陰に多くの苦しみや悲しみがあり、それが終戦とともに終わっていないことを知りました。戦争が残した問題は中国残留孤児だけでなく、つい最近になって、やっと、従軍慰安婦の問題についても目が向けられるようになり、今まで何十年間も戦争によって苦しめられてきた人達がいることを知りました。原爆後遺症を抱える人、北方領土の問題、日本に強制連行された朝鮮人の問題などまだまだほかにも私の知らない数多くの問題で戦争をひきずっている人がたくさんいると思います。

私の祖父母も、戦後、中国の満洲から引き揚げてきたそうです。私は、直接その話を聞いてはいませんが、母から少し聞いたことがありました。祖父母達は、1歳の子供を連れてやっとの思いで帰って来たら、弱り果てていたその子はすぐに病気で死んだそうです。それに追い打ちをかけるかのように、祖父の兄弟や親せきの人は「お前達が帰ってきたお陰で、こっちまで不自由な生活をしないとイケない」と何かにつけ辛く当たったそうです。この本の中でも、最善の方法として、子供を手放したのに、日本に帰ってみると親せきや近所の人は、「何てことをしてきたのか」「あなたたちは、自分の子供を捨てて来た。子供を放って自分達だけ帰ってきた。」と責め、そうした目で今でも見られることが悔しく涙を流したとありました。日本の仕掛けた戦争は他国の人の命を奪うだけでなく、同じ日本人の心も責め、ポロポロに引き裂くことだったのでしょか？

中国の人は日本に侵略されひどいことをされたにもかかわらず逃げる途中の日本人に食物や宿を提供したりしました。連れて逃げれば死んでしまうかもしれない小さな子や、途中で親と死別した子、置き去りにされた子たちを引き取り、裕福でもないのに生活の中で我子以上にして育て上げた人もいます。残された幼児は7千人とも1万人とも言われています。肉親が判明した時にも、「私達にとっても大事な大事な子です。それと同じように、日本のお母さんにとっても本当に大事な子だと思います。日本に行って親孝行してあげなさい。」と行った中国の人は本当に心の広い思いやりのある人達だと思います。もし、立場が逆になっていたら、日本人は同じようにできたでしょうか。日本は、今も戦争中に行った数々の悪いことを否認して責任逃れをしようとしているけど、この本を読んで、中国の人たちに恥ずかしいと思いました。悪かったことは認めて、早く何らかの形で誠意を示すべきだと思います。私にできることといえば、その人達が一つでも多く幸福になってほしいと願うことだけです。

この本に書かれていたことは、47年も前の出来事で、当時者以外の記憶からは薄れつつあるけど、今も世界のどこかで似たようなことが生じています。戦争や内乱によって食糧不足が続き、一番先に弱い立場の幼い子供たちが犠牲となっています。地球上の場所を変えて同じことをくり返しているけど、いつまでくり返したら終わるのでしょうか。

「戦争」、勝者にも敗者にも悲惨な苦しみもたらされ、何十年たっても消えず、それでも、人間は何の益もない戦争をするのでしょうか。

私には戦争を止める力はないけど、せめてその人たちの心の傷を理解し戦争を憎むことだけです。

## 歴史

### 「氷川清話」

(勝 海舟 著)

M 2 赤野 健一

この本は明治維新前後に活躍した政治家の勝海舟の言葉を書き記したもので、その内容は維新で活躍した人や信長などの古い人の事を語った人物談が主になっ

ていた。その中で面白かったのは、岡田井蔵の早業という文で、海舟に刺客が斬りかかった時、井蔵はあつという間に刺客を斬り殺した。その事を海舟がむやみに人を殺すべきではないと言うと、井蔵は私が居なかったら先生の首はもう飛んでいたでしょうと言った。勝舟は言葉を失った。確かに海舟の言った事はもっともであるし、人を殺す事はいけない事だが、それは維新前の荒れた時代の事だったので、井蔵がした事は悪い事だったとはいえないかも知れない。もし井蔵がそうしなかったら、海舟は死んでいたかもしれないし、そうなら、維新もどうなっていたか分からないと思う。

人物談の他にも、中国や朝鮮、ロシアなど外国のことについても語っているが、こういう政治的な事はむつかしくてよく分からなかった。

それから海舟は、人間万事についての学という文の中で何度も、余裕という言葉を使っている。何をすることも余裕がないと駄目だ、余裕がなければ大事を成すことはできない。しかし、そういう余裕というものは天性のものであるとも言っている。その余裕はいったいどんなものなのか僕には全く分からない。そういう余裕を持っている人にしか分かることではないのだろう。

海舟は、剣と禅という文の中で、自分は文学が大嫌い、詩や歌、俳句など一切やったことがないし、学問も全くしていないと言っている。それでもこのように名を残すような人になったのだから、すごいと思う。学が無くても、かなり頭が良くて、智恵のある人物だったのだと思う。

この本は、海舟の言葉をまとめたものだから、その人生観などが全て正しいとは限らないから、海舟とは違う考え方をした人の本をいろいろと読んでみないと、自分の考え方や物の見方が偏ってしまうかも知れない。でも、この本を読んで、いろいろと勉強になったと思います。

### 「名僧の言葉を鑑に」

(由木 義文 著)

M 2 櫻野 泰司

この本はそれほど歴史には関わりは無いが歴史上に名の残る名僧の言葉に興味があったので読んでみた。

読んだ後、一番印象に残ったものを2、3取り上げ、その感想を書くことにする。

まず、聖徳太子の「十七条憲法」の10条にある言葉で「こころのいかりを絶ち、おもてのいかりを棄てて、人の違うことを怒らざれ。(中略)われひとり得たりともいえども、衆に従い同じく挙え。」というのがある。つまり、私達は正しい判断もできるが、誤りもするのだから、たとえ自分の考えが正しいと思っても、他の人の考えに耳を傾け、行動せよと教えている。これを読み、自分の生活を振り返ってみた。僕達は人が失敗や悪い事をすると、相手が頭を下げているにも関わらず、文句を言ってしまう。その上、自分の失敗などには頭を下げず、「人のせい」にするという醜い行為に出たりもする。こうして改めて自分を考えると、自分がとても醜く汚いことに気づく。最近、新聞や雑誌なども芸能人のスキャンダルなどであふれている。世の中の全ての人間がそうだとはいわれないが、大部分が醜い方に入ると思う。その証拠にこういう雑誌が売れ、昼のワイドショーの視聴率が良いという現状がある。この現状をどうにかするのは難しいが、醜い自分を反省することくらいはしなければならない。

次に、江戸時代の禅僧である無難の言葉を引用する。それは、「金は天下のたから。あく人もては、人をくるしめ、我もくるしむ也。善人もては、人をたすけ、我のたのしむ也。」というもので、お金は善でも悪でもなく、それを使う人自身により、幸せにも不幸せにもできるものだからとっている。確かにそうである。今、日本人は本当に豊かで、よい生活をしている。しかし、だからといって日本人の多くが幸せだとはいえない。最近ではマイホームを持つのが夢だという人が多いが、たとえその夢がかなってもたいの人はローンに追われ、決して幸せとはいえない。豊かだから幸せというわけでもない。日本人はお金そのものだけにとらわれ、それをうまく使うことが大切だということを忘れてる。だから、本当に幸せな人は少ないだろう。無難は「金は飢えや寒さの心配をなくすためのものであり、悟りは自らの身の悪を去らせるためである」と言っている。だが、僕達の周りには、欲望を刺激するものが多すぎるため、欲望が膨らみすぎる。それに金を使い、不幸になる。いわば、日本人は無難のいう「あく人」なのだと思う。今の日本人に必要なのは、自分を知りコントロールすることだと思う。

## 「豊臣秀長」

(堺屋 太一 著)

E 2 竹内 一記

ある夏の日射しの強い日、僕は家の本棚の前に立っていた。

もちろん歴史についての本を探し感想文を書くためである。

ふだん僕の母は本をよく読んでいるが歴史の本はあまり読まないで家に歴史の本があるか不安だった。

しかし本棚の隅に「豊臣」という文字をみつけた。僕はその隅にあった本のほこりをとりながら手にしてみた。「豊臣」というのを聞くとほとんどの人が「秀吉」を連想すると思うが、このほこりをかぶった本は、「豊臣秀長」と書いてあった。

「秀長」？ 初めて聞いた名前だった。たぶん「秀吉」の親せきだと思っていたが、やはり弟だった。秀吉の弟で豊臣家の外的発展と内部調整において多大の功績を残した人物だ。生涯のうちに大小100回以上も戦場に立ったが、一度として失敗したことがなかった。

しかしこの秀長の尽くした功績は、軍事よりも内治の方が大きかったと思う。

兄のきらびやかな動きの陰で、脆弱な組織の中で終始よき補佐役を勤め抜き、秀吉のいやがることも、なし得なかったことも、秀吉が行うことにも協力した。秀長それを、自らの姿が目立たぬようになし遂げたのだ。

「縁の下の力持ち」という言葉があるが、まさにこの秀長はその縁の下の力持ちである。

歴史の中で名将、名参謀といわれる人物は数多く知っているけど名補佐役といわれるのはほとんど知らなかった。この秀長が初めてだった。この秀長は、日本史上もっとも有能な補佐役でありながら、ほとんど知られることのなかった人物である。

自ら目立たぬように、豊臣政権を支え続けた秀長のような人物は、現代において最も望まれる人材のような気がした。

## 「ナチス・ドキュメント」

(ワルター・ホーファー 著)

### E 2 長谷川 和彦

ナチズムのイデオロギー及び支配体制に関することに、「ユダヤ人問題」があります。ナチスは、さまざまな反ユダヤ措置を実行してきました。

ドイツ国会が公布したさまざまな法律によって、ユダヤ人は劣等な市民という烙印を押され、更にドイツ人の血液を持つ国民との結婚をも禁じられました。何故ユダヤ人は劣等民族だと決めつけられるのだろうか。そんなことは、人間には決められないと思います。そして、ユダヤ人は優秀なドイツ人を墮落させるということから、ナチスはユダヤ人とドイツ人の結婚を禁止しましたが、これもおかしいと思います。これらは、ナチスが行った差別と言えます。そして、ユダヤ人に対するの偏見は異常だと思います。

反ユダヤ人対策が深刻化している中で、パリ駐在のドイツ大使館員が、ユダヤ人の手で暗殺されました。これに対してナチスは、ユダヤ人迫害措置を実行しました。このため、ドイツ全国にわたって、無数の暴力事件が起こり、ユダヤ人の営業所、住宅、学校、教会堂が放火、破壊され、何千というユダヤ人が虐待、暴力を加えられました。しかし、この暗殺事件は、ナチスが長年待望のユダヤ人「清算」をSA式に実行できるようにするため、疑いもなくヒトラーの同意を得た上での、政治的暗殺だったそうです。ナチスの目的のために、関係ない人が殺される。こんな世の中に恐ろしさを感じ、そして不安な気持ちになりました。

アウシュヴィッツなどの死刑獄舎で、多数のユダヤ人が殺害されました。毒ガス集団虐殺は、残酷なものだと思います。ガス室の中にたくさんのユダヤ人を詰め込み、そしてディーゼルの排気ガスで人間を殺していき、そして金目の物を全て取ってから、その死体を埋めたそうです。この毒ガス殺人を実行する前に、SS隊員はユダヤ人たちに向かって、別に危険なことではないし、怖れることはありません、などとなだめるような言葉を言います。これは、犠牲者を不安にさせることは死を早めるためにできるだけ避けなければならないから、そんな言葉をかけるのだそうです。SS隊員のあの言葉、同情からではなく、仕事をより早く片づけるためのものだったのです。ナチスはなんて冷

たい心を持っているのかと思いました。そして、このガス室内のムツとする臭気によって事情を察していた大部分のユダヤ人たちは、ナチスの人たちがどんなに悪魔に見えたでしょうか。

これらのことからユダヤ人の人々がどんなに悩み苦しんだかわかりました。そして、このような恐ろしい世の中を繰り返してならないと思いました。

## 政経

### 「クジャクになった日本人」

(猿谷 要 著)

### C 3 南條 英夫

この本は著者がアメリカにいたとき聞いた話や経験などをもとに、日本とアメリカの違いや今後の日米関係についてのべたものです。

まず日本のイメージがどの動物にたとえられるかをアメリカ人に対して調査したところ、ここ数年間は一にクジャク、二にトラ、三にサルになったそうです。そこで欧米がクジャクにどんなイメージを持っているのか調べたところ、まず「現在の栄耀栄華」、次いで「富者」、それから「不滅性」で「不死鳥」の代わりとしても使われるそうです。

ところが一方で「警戒、監視」を象徴したり、また「借り物の装飾品」というイメージがあるのです。「借り物の装飾品」というのは胸にグサリとつき刺さりました。日本は基礎的な研究にあまり金を使わず、他国の成果を吸収してきらびやかな製品を完成してしまうからです。

今はもうどこへ行っても国際化、情報化という言葉が叫ばれる時代になりました。しかし日本は物ばかり国際化されて、心の方はあまり国際化されていないと思います。そうはいっても、さて心の国際化とはどういうことなのか、と考えると、これは容易なことではありません。たとえばアメリカ人と交渉するときにはアメリカ人のような心にならなければならないのか、などと考えていくととてもそんなことができるものではありません。どの国にも長い歴史があります。どの国の人もその伝統がつくりあげた生活文化の中で生きているのです。だからそれぞれの国の価値観や生活様

式というものを切り離して、心の国際化などというものはあり得るはずがありません。

しかしそれにもかかわらず世界のどの国の人もこれだけは共通に持ってほしいと同類項つまりカッコの中に入れられる同類項のようなものがあるでもいいはずで、異文化同士が接触しあって相互に理解を深めていくときに必要なもの—それが心の国際化とも呼ぶべき共通項であると僕は信じています。

それでは一体、そのカッコの中にどんな項目があるのかを考えてみると、僕には少なくとも2つの項目があげられるように思います。

まず第一に平等の観念を深く身につけること。国籍とか、人種、民族、宗教、性、職業などの差に関係なく、すべての人間は平等であるという観念を身につけることです。

第二に相手の立場になって考えるということです。今、日本とアメリカは友好的に密接な付き合いをしていますが、今後科学の進歩により地球がますます小さくなると、日本人一人一人にとってアメリカはますます近い国になるでしょう。そのとき現在の経済摩擦よりも、日米個人個人のレベルで生活習慣の違いや文化的背景の違いがクローズアップされてきます。そこから生じる誤解をさけるには、日米双方の「相手の立場を理解する」努力しかありません。それには日米両国がもっと相互に、社会一般や生活様式、価値観などを理解し合うことが一番大切でしょう。

国と国とが交流していくうえで、最終的には軍事力など問題ではありません。経済力は大いに関係してきますがもっと大切なのは生活様式だということになるでしょう。その生活様式を支えているのは、歴史に培われた文化であり、民族の心でしょう。世界全体が一体化してくるにつれ、もっとも大切なのは、結局人間そのものなのですから。

## 「NHKスペシャル 日米の衝突」

(NHK取材班 編)

### C3 三島 裕也

この本は1990年の4月5、6、7日にNHKスペシャルで放送されたもので日米構造協議についての舞台裏を探り、あらためて日米構造協議には日本にとって何かを考えた。日本は世界から見ればわかりにくい国で

ある。日本独自の社会習慣は、国際的に通用しないばかりか、日本人にとってもさまざまな問題の根本的な解決になっていない……。土地問題しかり、流通問題しかり、農業問題しかり……。そこへ登場したのが日米構造協議である。

好戦的なアメリカということで議会対策も含めて戦略的にやってきたという見方もあるが、日米構造協議は「アメリカの戦略だ」、「内政干渉の典型だ」といったレベルを越え、日本にとって重大な意味をもつ協議であることが見えてくる。

アメリカは1970年代の繊維摩擦以来、カラーテレビ、自動車、鉄鋼、半導体など貿易紛争の協議を日米二国間で行い、そのつど日本を突き上げてきた。日米構造協議も当初、『またその繰り返しか』という印象だったのが、全貌が明らかになるにつれて、従来の貿易紛争と質的に違うということがわかってきた。

アメリカの代表は「日米構造協議は日本の消費者の利益になる」と繰り返し言っていたが、それが戦略的であるにしろ、本心であるにしろ、アメリカが突きつけてきた200項目の要求は、日本の問題として日本自身が主体的に受け止めなくてはいけない性格のものだと思われる。日本はこれまで、世界からどう見られているか常に気にし耐えてきた国である。日本流の“物差し”がもはや国際社会の中で通用しないということがわかっていながら、何も変わらない。変えようとしてもしない。簡単に直せるところしか直してこなかった。しかし、日米構造協議はアメリカから「この部分をいつまでに、これだけ変えろ」と性急にストレートに迫られ、狼狽している。簡単に直せるところだけ直して、お茶を濁すわけにはいかなかった。正念場である。

日本は本当に分からない国だということが分かった。建て前と本音があってYESかNOかはっきり分からない国で、いつも玉虫色の結論を出す。問題を先送りしたり金ですべてをすませたり。これが今の日本独自の社会習慣だと思うとぞっとする。日頃、何気なしに生活しているが、このようにして行動を文字にして書いてみると、あらためて自分達のなげなさがうかがえる。豊かさを求めてもなかなか手の届かない日本人の心からきたものだと思う。アメリカに対して、軍事的ではなく、経済的に、第二次世界大戦前のような侵略をしているかのように思える。アメリカのライバル国であった旧ソビエトが崩壊した今、敵対意識を持たれ



るのは日本であり、日本は少しずつでも変わっていく必要があると思う。

## 「ニッポンのODA」

(村井 吉敬 著)

### A 3 土井 友恵

ODA とは政府開発援助の事で、先進工業国が発展途上国に対してお金や物や技術を貸したりあげたりする事です。しかしこの援助はただ単に善意で貧困国の救済を目的になされているとは言えません。例をあげれば、4500万もの人口を持ちしかも最も貧しいエチオピアへの ODA は累計で177億なのに、人口760万のザンビアにはその5倍以上もの ODA が拠出されているという事実です。

ではどうやって援助額が決められているのかというと、第一に反共、親西側陣営であることです。日本の ODA は日米同盟によって大きく縛られていて、相手国が親米・親西側ないしアメリカと軍事同盟国でありさえすれば独裁政権だろうが軍事政権だろうが援助対象国として重視されてきました。アメリカと軍事同盟にあるフィリピンに対してマルコスが戒厳令を布いた後に ODA が増額されたり、アフガニスタンに親ソ政権ができると大幅に減額されたりしています。そしてトルコ・エジプト・ナイジェリア等々のアメリカが戦略的に重視する国には、日本も必要以上に ODA を拠出しています。

第二の基準は地政学的なものです。日本はアジアの国なのでアジアとの良好な関係が大事です。従って、西アジアまで含めると ODA の四分の三はアジア向けです。

第三は、経済的な重要性です。日本にとって重要な天然資源があり、資本市場、商品市場として価値ある国が重視されます。最初のエチオピアとザンビアの例で言うと、エチオピアはコーヒー以外にたいした輸出品がなくその上余りに貧しいので市場価格が低く、しかも社会主義政権です。それに対しザンビアは銅、コバルトの多量産出国です。これらの違いが ODA の数字の差となっているのではないのでしょうか。

また、汚職疑惑が起こったり、多額の ODA が全く無駄なものとなったりしたものも数多くあるとも書かれてありました。

私は国民の税金の一部である ODA をそんな目的で使って欲しくないと思いました。本当に貧しくて動けなくなっている国に、その国が今一番必要としているものの為に有効に使って欲しいです。それには今の様に不当な理由で差がついている援助ではいけないと思います。私は ODA は少な過ぎてもいけないし、又、手助けの範囲を越えてもいけないと思います。文化はやはりその国自身で造るものだからです。一つの文化だけが発展していてもいけないし手助けし過ぎて全てが個性のない文化となってもいけません。

これらの見極めをするには、外交政策を政府とくに官僚が決める今の様なやり方でなく、国会を使って十分に話し合っただけで決める様にすべきだと思いました。

## 「広島が消えた日―被爆軍医の証言―」

(肥田 舜太郎 著)

### A 3 三浦 紀子

昭和20年1月敵が台湾沖まで近づいて威力偵察行動を行いえるまでに日本の戦力は低下していた。この頃既に広島は呑み切れないほどの軍の集団を呑み込んで、各方面に半身不随の症状を呈し始めていた。兵器、弾薬、被服、糧秣はもちろん、駐留、滞在、輸送などあらゆる分野にわたってある種の混乱と無秩序が発生していた。

その広島に悲劇が訪れたのは8月6日の朝だった。肥田軍医は病人に注射しようと腕をまさにとろうとしていた。その瞬間“かっ”とあたりが真白にくらんで焔のあつきが顔と腕をふいた。両手で目を覆ってはいつくばり匍ったまま僅かに顔をあげると、一瞬の閃光と熱風はどこへ去ったのかと思うくらいに静かだった。その時広島空を見渡すと、大きな火の輪が浮かび、それが巨大にふくれあがり、広島市を踏みくだす火柱となって立ちはだかっていた。すると市いっばいに広がる黒雲が発生し、見る限りの万象を巻き込みながら太田川の谷を埋めて、戸坂村へ向かっておしよせ始めた。この時広島市に向かう途中肥田軍医の見たものは「人間」ではなかった。人間の形はしていたが全体が真黒で裸だった。裸の胸から無数のぼろ切れがたれ下がり、胸の前に捧げるようにつき出した両方の手先から黒い水がしたたり落ちていた。異様に大きな頭、ふくれ上がった眼、顔半分はまだ腫れ上がった唇、焼け

ただれた頭に毛髪は一本もない。ぼろと見たのは人間の生皮、したたりおちる黒い水は血液だった。広島市はこのような負傷者と死体でいっぱいだった。

肥田軍医はすぐ戸坂村に戻り数えきれない程の負傷者の治療にあたった。が、この物不足の激しい時に十分な手当てができるはずもなく、ただ火傷に油をぬるだけだった。身動きできない患者の傷口には血を求めて蠅が群がり、眼といわず鼻といわず真白な大きな蛆が這いまわっていた。死んでも満足に葬ることもできず、ただ運び切れないほどの死体を穴を掘っただけの臨時の火葬場で何体も一緒に焼くだけだった。火傷が治っても、高熱と出血、全身の紫斑、抜け毛の症状で次々と死んでいった。後に急性放射能症による造血機能障害であることが判明した。この恐ろしい広島を見た肥田氏は亡き戦友に原爆に負けず生きることを誓う

のだった。

戦争は本当にあってはならないものである。今になってもまだ核兵器を持ちたがる一部の人達に8月6日の広島、9日の長崎を味わわせてやりたいと思った。私は以前、祖父母から、大火傷を負って「水、水。」と言いながら亡くなった母の姉の話聞いた事があるが、その時祖父母が、母が泣いているのを見て、とてもたえられない気持ちになった。ここにも戦争の被害者がいたのである。幸い祖父母は原爆が投下された翌日市内を歩いたにもかかわらず、病気にはなっていないが、子供を失った心の痛みは、自分が被爆を受けるよりも親としてつらいものだと思う。同じ人間同志が憎み合い、殺し合おうとしている今の世の中がとても情けなくてたまらない。核の痛みを知っている国の一人として、今、何かしなければいけないような気がする。

## 随想・読書雑感

### 「江夏の21球」

M5 東川 正

今の時代、本が満ちあふれて、教科書、週刊誌、漫画、小説、情報誌など、大変多くの種類の本が、所狭しと並んでいる。本といえ、6つ離れた兄が家にいないときに、隠し持った本を机の中からさがしたこともあり、家の本棚を見ると、星新一や西村京太郎の作品から、5年前の写真週刊誌、タレントが書いた本など多くのジャンルにわたって、本を集めていた。

その中で、特に好きな作品は、「スローカーブをもう一球」(山際淳司著)である。この本は8つの話から成り、その中の1つに、特に好きな「江夏の21球」がある。

昨年プロ野球日本シリーズ、西武-ヤクルトも、盛りあがったが、伝説とも言われた、1979年の日本シリーズを抜きにしてプロ野球の歴史は語れないと思う。

「江夏の21球」とは、次の通りである。

1979年11月4日大阪球場、日本シリーズ第7戦、近鉄-広島、勝った方が日本一に輝く。9回表を終了で、3-4で広島がリードしているものの、近鉄が激しく追い上げている。

9回裏、江夏が無死一、三塁のピンチをむかえる。

広島古葉監督は、一点も与えまいとする内野の前進守備の指示を出した。そして、池谷、北別府に投球練習を指示した。このことでリリーフエースである江夏は自尊心を傷付けられ、自分を見失ってしまう。四球を与え、無死満塁。この時江夏は「ここで(投手)交代させられるならば引退をしてもいい」と思った。すると衣笠が「俺もお前と同じ気持ちだ。」と江夏に声をかけた。この一言が江夏の心を奮い立たせ集中力がよみがえり、最終的には、三振、スクイズ失敗、三振で、広島は、初の日本一に輝いた。

あまりにも簡単に書きすぎたため、わかりにくい部分が多いと思うが、この21球の中で最も大切な点は、冷静さを失い、敗北も覚悟した江夏に再び集中力をよみがえらせたのは、衣笠の一言である。古葉監督と、江夏との間で、激しい気持ちのやりとりがかわされた。江夏はマウンドの上で大きな孤独感を背負い、自分の目の前にある敵を倒そうとした。最後の文章が印象的である。「江夏はベンチに戻り、うずくまって涙を流したという。」

このように頂点に立ったものでありながら、孤独感や疎外感とたたかった人はスポーツに限らず、他の分野でも多くいると聞く。ある喜劇役者は、過去彼と最も親しい人の陰謀で劇団を追放させられ復帰して、後に座長になった時でも、精神的な外傷が、治ることがな

かったと言う。

本を通じて、これまで多くの人と接する事ができた。「真実は小説より奇なり」とよく言われるらしいが、本当にそう思うようになった。ドラマが人物を創るのではなく、人物がドラマを創るのだ、と数多くの人物が教えてくれたように思う。

## 「ターニング・ポイント」

E 4 中本 昭雄

現在の日本の教育制度の中で、高専制度というのは異端児ではあるが、私は優良な制度だと思っています。しかし、日本全体の教育制度の弊害や、高専制度自体の問題もあり、その有効性があまり発揮されていないように思う。それで、高専はよく中途半端だと言われている。しかし、私は高専程度で良いと思います。その理由は2つあります。

1つには、これからの高齢化社会において就職年齢の低下は、最も有効で現実的だからです。しかし現在の高専では数が少ないし、また卒業しても学士号が与えられないので、大学編入者も少なくない。

これらを解決する方法は、大学を改革すればよいのである。大げさには聞こえるが、誠に簡単な方法であって、文部省が「専門課程を終了すれば、教養課程を修得しなくても学士号を与える」という一通の条文を出せばよいだけであります。これは、最初の2年間の教養課程を飛ばして大学を2年間で卒業させるというものである。もちろん大学院に行くのに有益な教養課程は自由に受けられる。しかし、2年行っても4年行っても同じ学士号しか得られません。

これによって得られるメリットは非常に多い。まず卒業年齢の低下、次に大学の定員が1.5倍位になり過度の受験競争の解消、又社会問題にもなっている親の負担の軽減、文部省念願の大学院大学の設立等あり、又高専卒においても学士号が得られるようになります。

もちろんこれによって、今までの高校の受験校としての役割も終わり、変革がせまられます。それは、授業数を減らすと共に2・3年のレベルを大学教養課程まで上げ、国・英以外の科目は、2・3科目選択させるというものです。又大学入試はやめ、成績やクラブの活動によって決める推薦制度にすべきです。いわゆ

る英国のシックスズ・フォームに準ずるものである。

2つ目には、学生を専門化させると自主性を持つようになり、大人として自覚を持つようになると研究報告されているからです。その点高専では早い時期から専門化を行っています。しかし今の高専生（自分も含めて）を見ると、その有効性は全くないように思います。それには、過度の一律教育と授業の質、教官数等に問題があると思います。質というのは、高専のモットーである「広く浅く」というのが問題なのです。そのため授業数をやたらと増やし学生の意志の反映されない一律教育になって、結局何をやったのかわらなくなってしまいます。ゆえに高専生には、自主性が見られないのであります。

これらを解決するには、まず学科別入試を止めるべきである。なぜなら、私の経験等から、中学生が学科を選択するにはあまりにも情報や認識力が不足しており、親や先生等周りの影響を強く受け、学生の自主性が反映されていない場合が多いからである。それで2・3年までは一般教科を行ない、その後専門科目を選択するというものである。これは学科別けとは異なり、例えば電気ならば、電子・情報・制御・通信・弱電・強電等という風に他学科も分け、応数・応物等も含めて、その内から2科目以上選択させるというものである。こうすれば組み合わせは非常に多くなり、学生の自主性が重んじられ、非常に個性化して大人の自覚を持つようになるでしょう。又授業数は激減しますから、学生は自由に振舞うようになり、図書館で研究調査をしてレポートを書き自立心が付くのです。又就職する際も、企業をネームバリューでなく職種で選ぶようになり、又企業の方も校名ではなく専攻科目によって採用するようになるでしょう。しかしそのためには、教官数を倍近くに増やす必要があるでしょう。そうすれば授業の質も向上し、チュートリアル（個人授業）も可能になるのです。

高専は今、ターニング・ポイントに差ししかかろうとしています。これからの高専を良くも悪くもするのは高専自身の問題です。今のままでいいとは誰も思っていないはずで、口先だけでは政治家と一緒に。今の政治を反面教師として、ぜひ抜本的改革を行ってほしいものです。

## 新任教職員随想

### 高専時代の自分を振り返って



機械工学科

中迫 正一

図書だよりの原稿という事で、何か本に関する事を書かなければと思い、さて、今までにどんな本を読んだのかと思い出してみた。思い起こせば約11年程前に呉高専に入学して以来、目を通した本といえば〇〇工学とか△△力学などという理工系のものがほとんどであった。恐らく、よっぽど興味を持った物が無い限り高専生の大半がそうであるだろうと勝手に推測しているのである。それでも少しは理工系以外の本も読んだのでその中の2冊について簡単に紹介させて戴こうと思う。

1冊目は、確かナポレオン・ヒルという哲学者が書いた「成功哲学」という本である。著者の詳しい略歴は覚えていないが、内容は題名の通り、どうすれば物事を成功させる事が出来るかという事について書かれた本であった。その中で著者は意識改革、簡単に言えばやる気が重要であると論じており、記憶は定かではないが、以下のような詩を書いていた。

「もしあなたが負けると“考えるなら”、あなたは負ける。もしあなたがもうダメだと“考えるなら”、あなたはダメになる。……世の中をしてみる最後まで成功を願いつづけた人だけが成功しているではないか。すべては“人の心”が決めるのだ。……私はできる、そう考えている人が結局は勝つのだ！」

大学を卒業後、企業にいた私は同じような事を上司から言われた記憶がある。それは“実力＝(知力+体力+運)×やる気”と言う事である。どんなにすばらしい知力・体力・運があろうともやる気がなければ実力はゼロだと言うのである。

2冊目に紹介するのは、あいだみつおという人が書いた「人間だもの」という本である。これはベストセラーにもなった本なので読まれた方も多いと思うが、

同様に著者の詳しい略歴は覚えておらず、確か僧侶になる修業を行った人だったと思う。この本はいくつかの詩の中に、所々解説が入るといった構成となっており非常に読み易い本であった。内容は、人間の弱さとかもろさについて書かれた本で、例えば、以下のような詩を書いている。

「ぐちをこぼしたっていいがな、弱音を吐いたっていいがな、人間だもの。たまには涙をみせたっていいがな、生きているんだもの。」

恐らく、著者が僧侶になる修業を行った人だからであろう。しょせん我々は仏ではなく人間なんだから弱いところもたくさんあるよという内容だったと記憶している。

2冊の本を簡単に紹介させて戴いたが、1冊目は自分自身を勇気づける時に、2冊目は慰める時になんとか頭に浮かぶものである。しかしながら、ここで大切な事は、1冊目のような気持ちで頑張ったあとで、2冊目のような心境になるのか、始めから2冊目のような気持ちでいるかではないかと思う。オリンピックは参加する事に意義があるなどと言うが、それは終わってからの事であって、一人一人、金メダルなのか入賞なのか、それとも予選突破なのかはわからないが、目標の違いこそあれ、それに向かって連日とてつもなく苦しい練習を重ね、プレッシャと戦っているのだと思う。その結果、運悪く自分の目標を達成出来なかった時に“ダメだったけど、自分もよく頑張ったな”と言えるのであって、最初から諦めて何もしないのとは全く違うのであろう。

以上、長々と書いてきたが、私自身、哲学者でもなく、僧侶でもないので、偉そうな事を言うつもりはさらさらなく、単なる図書の紹介にすぎない。自分はどうかだろうと考えると、1冊目では、よく頑張ったなと思った時がその人の最終地点であって、最後まで諦めなかった人が結局勝つのだと力説しているが、残念ながらそれほど強靱な精神力を持ち合わせていない私は、しばしば2冊目のお世話になっているのである。ただ、私自身の反省を含めて、たまには〇〇工学とかいう本ばかりでなく、文学・歴史・政治・経済・哲学などの本を読むのも良いことではと思うのである。

## 職場を通しての女性感



学生課長

永井 康夫

呉高专に着任以来、仕事を通じての女性との接触が非常に多いように感じられます。着任時における種々の手続等お世話をかけたのは、ほとんど女性であった印象を持っています。この印象は、最近数年、私が在籍してきた前任官署の部局等における女子職員数が少なかったこともありましようが、やはり率直な感想として、本校における女子職員の職場に占めるウェイトが、質量ともに非常に高いように思います。

なお、私事ではありますが、勤続25年のキャリアを持つ私の妻が、一身上の都合により本年3月31日付けをもって、永年の公務員生活にピリオドを打つことになりました。一身上の都合といっても、早い話が私の転任に伴うものであることに言を待ちません。私としても、転任という私自身のエポックに際し、妻が永年就いた職業を去ることに一抹の忸怩を感じないわけはありません。

以上の如き私をとりまく最近の環境の変化に対する心境として、非常に難しいテーマではありますが、「職場を通しての女性感」について、愚考を書きつらねてみることにしました。

私自身、御多分にもれず、物心に目覚めはじめた中学生の頃から青年時代を通して、女性に対する憧れは相当なものであったと思います。それ故、社会科の授業の中での婦人参政権運動に代表される女権拡張運動については非常に感銘を受け、フェミニストを自任した一青年でもありました。

ところが、学生生活を終え、社会人となった私は、1970年代初めのウイメンズ・リブ（法的・社会経済的平等だけでなく心理的な女らしさの抑圧や性別役割そのものを問題としたフェミニズム運動）の思潮には心情的にほとんど影響されることなく、結婚を経て30歳代に突入すると、いつしか仕事オンリーの猛烈職員に変身していました。その変身した私が、職場の中で自他

ともに対し常に発する言葉が、「男なら、粉骨砕身、刻苦勉励をモットーに職務に邁進せよ！職務を通じて社会に貢献することは、これ偏えに妻子家族のためなり。」でした。このことは、フェミニストを自任した紅顔の一青年が、ウイメンズ・リブが告発対象とした「家父長制＝男性支配」に見事に転向していたということで、同思潮からは大いに自己反省を強いられることになるかもしれません。

しかしながら、私自身観念するところは、ウイメンズ・リブの思潮を全面的に受け入れる程ラディカルではなく、むしろ、男女の生物学的、身体的条件の差異に基づく両性の特質をお互いに尊重しあうことが、人間生活に良い結果を招く第一歩ではないかと考えております。男女間の地位に差があることの最たる要因は、両性の特質自体に向けられるものではなく、古来より連綿と保持されてきた社会制度（とりわけ封建的管理社会）による悪弊の極め付けの論理に帰せられるべきものです。

例えば、職場における女性の「お茶くみ」の問題があります。接客時や休憩時に女性がお茶を入れてくれる姿は、女性の特質としてのやさしさ、美しさを強調することにはなっても、女性の人格無視とは私の目にはどうしても写らないのです。只、お茶を入れてもらう男性側に、「お茶くみ」は女性だけの当然の仕事と極め付け、ふんぞり返っているような態度では、このようには写らないと思います。要は、男性側に感謝の念という女性の特質を尊重する気持ちが必要なわけです。

さらに、両性の特質を尊重しあうことが第一歩とすれば、第二歩は人間としての可能性を男女平等に認めあうことだと思います。今後、男女雇用機会均等法、育児休業制度等行政施策の充実化と相俟って、職場における女性の地位は、経済的自立から社会的地位の向上へと進展していくものと考えられますが、その一方で、子育てに代表される主婦業という重要な責任も未来永劫女性から離れることはないでしょう。ならば、どちらを選択すべきか、どちらを優先すべきかを議論する必要があるかといえ、その必要はないと思います。何故なら、人間としての可能性に根差した自分の生き方を選択する権利は、自分のみには与えられるべきものであって、誰からも阻害されるものではないからです。

## 海外だより

遙かなるスコットランド  
での思い出一般科目教官  
笠松 義隆

## 1. はじめに

文部省の在外研究員として平成4年3月28日から9月24日までの6ヵ月間、イギリスのスコットランドで研究生活をさせていただきました。海外短信として現地から呉高専だより(第33号11頁)に報告させていただきましたが、紙面の都合で言い尽くせなかった体験、失敗などをスコットランドに想いを馳せながら書いてみたいと思います。

## 2. 大学での研究

滞在したセント・アンドリュース大学はスコットランドで最古の大学で、その建物は1ヶ所だけでなく史跡と共に旧市街の中に点在しています。学生数4,500人と大学関係者1,500人を合わせた6,000人は人口16,000人の1/3を占めますから、この街ではゴルフと共に大学の存在価値が如何に大きいか分かります。

研究室のスタッフは、Riedi 教授, Armitage 助教授, James 助手の3人ですが、Armitage 助教授の専門は異なりますので、実質的には2人です。我々の研究は核磁気共鳴(NMR)という測定手段を用いて、強磁性体の中の超微細磁場を調べる、分かり易く言うと磁石の磁気メカニズムを解き明かす情報を得るのが目的です。核磁気共鳴とは、磁場中に置かれた原子にテレビ電波のような高周波を与えると、原子核からその原子核特有の応答信号が来る現象です。その信号は同じ原子でも化合物により様々に変化するので、それを温度や圧力などを変えて詳しく調べることで、磁気の起因となる電子の状態を推測することが出来るのです。医学ではMRとして応用されています。

研究テーマはLu-Fe系の強磁性化合物の超微細磁場をNMR法により研究することでした。装置はコ



ゴルフ発祥の地セント・アンドリュース

ンピューターですべてコントロールされているので、試料をセットすれば数時間後にはデータが自動的に得られるという便利なものです。ただ、使用方法を助手のJamesから教えてもらうのですが、はじめ彼の英語がほとんど分からず苦労しました。彼はオックスフォード大学の博士課程を修了して1年前に赴任したイングランド人なのでなまりはないと思うのですが、口にアメ玉を入れて喋っているのではないかと思うほど聞きにくく早かったのです。しかし、彼とは実験室で2人きりになることが多く1日中話したり、時にはパブにも行ったので、帰国する頃は彼の英語が一番よく分かるようになりました。Riedi教授の部屋で平均週一回データについて話し合いをするのですが、教授は私の語学力に合わせてゆっくりと、しかも重要なことはメモを書きながら話してくれるので助かりました。

物理学科棟の中庭には池がありますが、学位を取得した者が仲間達によりこの池の中に投げ込まれるという伝統行事がありました。滞在中、女性も含めて3人の学生がこの手荒い歓迎により祝福され、その後ずぶ濡れのままシャンペンで乾杯する光景を見ました。

## 3. 独立国?スコットランド

はじめスコットランドの旗を知らなかったため、イギリスに来てイギリスの国旗でなく見知らぬスコットランドの旗があちらこちらにひるがえっているのを見て異様に感じたものです。この欄で以前にも紹介されたようにイギリスはイングランド、スコットランド、

ウェールズ、北アイルランドの四つの国から成っている連合王国ですが、この度の留学でこのことを改めて思い知らされました。普通の銀行が紙幣を発行するため同じ額の紙幣が数種類あり、それらの一部はイングランドまたはスコットランドにおいて両替しないと使えないというのには驚きました。また、テニスの試合をするとき、次のような会話を耳にしました。「この試合はインターナショナルだ。何故なら、あなたは日本人、あなたはスコットランド人、あなたはイングランド人、そして、私がカナダ人だからだ。」そのほかでもスコットランドが明らかにイングランドとは別の国であることを強調することは、スコットランドの人々と仲良く付き合うため必要だと感じる事がたびたびありました。スカートのような男性の民族衣装キルト、バグパイブによるかん高い音楽、スコティッシュダンス、スコットランド方言など、これらを守り続けているのは彼らがスコットランドの伝統ある文化に誇りを持っているだけでなく、まるで独立国スコットランドの存在を主張しているようにも感じました。



キルトを着て結婚式

#### 4. 日常の生活

いちばん戸惑ったのは、夏でも木枯らしの吹く寒い日が時々あることです。昼は長袖かセーター、時々はキルティングを着て、夜は暖房する夏など想像もしませんでした。しかし、良くないことばかりではありません。ハエ・蚊には悩まされずにテニスを長くしても疲れは少なく、衣服を少し厚めに着てさえおけば快適な毎日を過ごすことができました。桜の木が意外に多く5月一杯満開の花を楽しむことができ、そして、公園の草花はよく手入れされて楽しい花文字が見られ、夏でも1ヵ月以上咲き続けていました。夏至の頃は夜

10時すぎまで作業できるほど明るく、真夜中になっても薄明るいため星を見ることは出来ませんでした。

小さな観光の街セント・アンドリュースは日本の倉敷に似たところがあり、商店街の飾りは素質ですが中に入ると外部から想像もつかないほど広くて豪華な店が多いように思います。歴史の長さを誇らしげに書いたプレートを掛けた店、数えきれないほどの骨董品を展示したレストラン、そして数百年前の街の様子の写真をたくさん壁に張ったパブなど、街全体が博物館のようです。14世紀から大きな変化をしてない自分達の街を誇りに思っているとパブで酒を飲み交わしながら聞いた時、焼失しない史跡を持つ彼らをうらやましく思いました。

英会話の上達のためにもパブに行ったほうがいいと先生から言われましたが、はじめて一人でパブへ行ったときは特有の雰囲気の中で緊張していました。しかし、暫くして女子大生2人が入って来て勉強を始めたときには啞然とし、恐る恐る様子をうかがってビールを飲んでいて自分がおかしくなりました。それからは治安の良い学生街だということが分かり、英会話上達のためパブ巡りをしたのは言うまでもありません。

#### 5. 蛍の光

日本で歌われているスコットランド民謡はたくさんありますが、蛍の光はその代表的な曲です。英会話学校の親睦会へヨーロッパの学生達に混じって参加した時のことです。3人の演奏家と共にみんなでスコットランドの音楽とスコティッシュダンスを楽しんだ後、最後に聞き慣れた蛍の光が流れてきました。両手を交差させてみんなで輪になってこの歌を歌うのです。テニスでお別れ会を開いてくれた時も同様でしたが、この歌を通じて日本とスコットランドとがより密接した関係に感じました。

#### 6. おわりに

語学力が乏しく短い滞在期間における印象にすぎず、一面的で誤った内容もあるかと思いますが御容赦下さい。最後に、外地留学の機会を与えて下さり、在外中お世話になりました教職員の方々にお礼申し上げます。

## 留学生手記

### スリランカを出て今思うこと

電気工学科3年

チンタカ グナティラカ

私が日本へ来てからもう1年間たちました。私の今の生活は15ヵ月間くらい前とは全然かわっています。今は日本人の学生たちとほとんど同じように生活をしたり、授業を受けています。私はアジアのスリランカ人です。来る前はスリランカのシンハラ語と英語しか話せなかったが今は頭の中のモーターが日本語ばかりになっています。

1991年の10月日本へ来てから最初の6ヶ月間はすごく国際的でした。いろいろな、たくさんの国々から日本の奨学金をもらってここへ来ている150人くらいといっしょにやったその6ヶ月間は本当に面白かった。その中の40人くらいは私と同じような高専に入る学生だった。その皆、東京のある日本語学校で6ヵ月間勉強をしました。英語のできる人があまりいなかったの、その時習っていた、全然なれていなかった日本語でしか話ができなかった。それでも一週間くらいもたないうちに皆と仲よくなりました。留学する事のたくさんのプラスポイントの中から一番最初に分かって来たのはそれでした。勉強は難しかった。でもやる気を起こさせるものでした。皆と一緒に遊びに行くとき本当に楽しかった。でも直ぐその時期も終わってしまいました。皆いろいろな高専に入ってばらばらになりました。私は呉高専に入りました。友達がいなくなってまたスリランカから来た時とまったく同じように寂しくなりました。

私の国スリランカは日本のような島国です。大きさは日本の6分の1くらいであって人口は1700万人くらいです。首都はコランボでしたが、7年くらい前に変わって今はスリジャヤワルダナプラコッテになっています。向こうでは季節がありません。一年中は温かくて27度くらいだと思います。それでも湿度が低くて日本の夏より気持ちがいいです。スリランカは農業の国です。おもな産業は紅茶と宝石です。今、日本にある

セイロン紅茶のセイロンと言うのは20年ぐらい前までのスリランカの名前です。

スリランカ人の80パーセントぐらいはシンハラです。17パーセントは南インドと同じようなタミルです。その他イスラム人もいます。75パーセントは仏教です。その他ヒンズ、イスラムとキリスト教もあります。生活するのにスリランカはすごくいいと思います。インド洋の宝石といわれているきれいな海岸で囲まれた美しい島です。でも技術的には日本よりかなりおいています。スリランカと日本を比べたら一番大きな違いがそれだと思います。

スリランカの識字率は南アジアの他の国々と比べたら、けっこう高くて、87パーセントになっています。だいたい学校で12年間勉強をして、できれば大学に入って、また4、5年間やります。小学校で5年間勉強してまた5年間中学校でやります。中学校から高校に入るのに全国レベルの試験を受けなければなりません。この試験を通して高校に入れる学生は多いですが、そこで2年間勉強してまた試験を受けて大学に入れるようになる学生の数はすごく少ないです。大学の数が少なく試験も難しいから大学へ行ける学生が20パーセントぐらいしかいません。その中から一番難しいのは500人ぐらいしか入れない医学部と400人ぐらいしか入れない工学部です。

スリランカで一番有名なスポーツは日本人の皆さんのあまり知らないクリケットというスポーツです。野球の元はクリケットだと思いますがそれを初めてイギリスで2、300年ぐらい前やったそうです。世界で一番高レベルのクリケットをやっている国の中にスリランカも入っています。サッカー、バレーボール、バスケット、水泳のようなスポーツも向こうでやっています。

同じ、アジアの国でも日本とまったく違うスリランカ、皆さんもチャンスがあったらぜひ行って見てください。

私はこれからも2年間ぐらい高専で勉強します。今は友達がたくさんいますが卒業するまでに1年生から5年生までの皆と仲よくなっていつまでも忘れないような高専の時代を作りたいです。皆さんよろしくおねがいします。



## 私の推薦する本

木村 尚三郎〔ほか〕著

### 「名言の内側」

(日本経済新聞社)

機械工学科 岩本 英久

どことなく心に響き、的を得ていて感心する言葉があります。その言葉は昔から多くの人々の話題となり賞賛されて名言として今に残っているのです。しかし、名言は時代や風習によってその解釈や意味が微妙に異なっていることがあります。また、その発祥には意外な事実が隠されていることもあるのです。この本では、そういったエピソードや読者の意表をつく意外な一面を120例あまり紹介しています。

例えば、「君子は豹変する」という言葉があります。これは、思想や信条をガラリと変えて人を裏切る様を非難することに使われています。「豹変」という言葉にはマイナスイメージがつきまっていますが、これは本来の意味ではないのです。

「君子は豹変する」は、もともと『易経』の「革」の卦の説明文の一句であり、「君子は時代の推移に従って自己変革を遂げ、豹の毛皮が抜け変わるように鮮やかに面目を一新する」というのが原義なのだそうです。すなわち、立派な人間は過ちを犯しても、すぐに改め、それはちょうど豹の毛皮の文様が目立つようにはっきりしている、という意味になります。これは鮮烈な自己変革を賞美したもので、決して悪い意味には用いられなかったのにいつのまにか意味が「豹変」してしまった例の一つです。

その他、「一石二鳥」、「余の辞書に不可能の文字はない」など諺や名言以外に「ジューン・プライド」や「ハネムーン」などの名語の発祥にも触れています。

斯くして様々な格言、金言、諺などのルーツに迫り、新鮮な解釈で現在の社会を鋭く風刺しているようで、ただ読み流すだけでも雑学としての知識を増やすことができます。一つの名言に対して約2ページという文章もとろつき易い魅力です。ぜひ、一読してもらいたい一冊です。

C. A. デソー、E. S. クウ共著

### 「電気回路論入門 上、下」

(ブレイン図書出版)

電気工学科 綿井 伸爾

電気回路学は、電気磁気学と共に電気工学の重要な基礎をなすものです。従って多くの入門書が出版されています。これらの入門書の中で、ぜひ一度は読破して欲しいのが本書です。2人の著者は、ベルギー出身の C. A. デソー、中国出身の E. S. クウと国際的ですが、2人とも回路システム理論の著名な学者です。本書は、もともとアメリカのカリフォルニア大学バークレー校の電気工学科3年生用の教科書として書かれたもので、上下巻合わせて19章からなり868ページ、各章末の問題の合計が320問というボリュームにまず圧倒されます。しかし、多くの図表を使い丁寧に正確な説明がなされていて、大変分かりやすい内容です。

1章から7章までは、簡単な回路を取り扱っています。キルヒホッフの法則から始まり、2端子素子を時間的不変か時間的可変か、あるいは線形か非線形かといった観点から分類しています。続いてたたみこみ積分、状態空間法、フェザー法等の技法が述べられています。8章から12章までは、複雑な回路を取り扱っています。変成器、制御電源等の標準的な結合素子について述べ、グラフ理論を応用した回路解析法、テレゲンの定理について説明しています。13章から19章までは、非線形および時間的可変な回路も含んだ回路についての主要な理論的結果が述べられています。

前にも述べましたが、本書は教科書です。著者によると、1章から17章までなら約60時間の講義で十分だそうです。アメリカの一流大学の講義の密度の濃さをしのばせます。本校電気工学科の高学年なら、十分に理解できる内容です。春休みや夏休みなどまとまって時間のとれるときに、じっくり取り組んでみて下さい。蛇足ながら、章末の問題の解答集も出版されています。また、上下巻を重ねると厚さ約6.5cmとなり、勉強に疲れたときの昼寝の枕として丁度良い高さです。

住井 すす著

## 「橋のない川」 第7部

(新潮社)

建築学科 實成 憲二

作者の住井すすさんは、差別問題を川にたとえて、これに橋を架けたいとの強い想いで、50歳を過ぎてから『橋のない川』と題するシリーズを書き始めたといわれる。現在、世界各地で起きている民族間の対立なども根こでは共通する問題でもあろうが、早急に解消させたい課題である。

このシリーズの第1部が出版されたのは今から32年前、第6部(完)がでたのは12年後のことであった。それからでも20年近くを経て、90歳になる作者が、どうしても書き残し、ぜひ後世に伝えたいと、再び稿を起こされたのがこの7部である。私には何がその様なことに駆り立てたのかということに、とても興味をそらされた1冊であった。

1部から6部は明治末期から大正13年春までを、今回の第7部もそれに続いて昭和3年春頃までの史実を背景に物語が展開される。今から僅か数十年前のことである。作者は一貫した視点で、差別は日本の政治の仕組みにあり、明治以降の天皇を頂点とした社会がいかにして維持されていったのか、それと表裏して差別が温存され利用されたことを詳細に語られる。人間、皆等しく「裸」で生まれてくるものに、差があるはずもなく、それがあるのは“つくりごと”であるからだと言いつける。

そして、今起きている事柄などに対しても、ものごとの真実を見据える知識を学ぶことで、“宇宙の法則”を人間の哲学とすべきだとも言う。それはまた、水平社宣言の「社会は人間の意識の成長、発展によって必然に変化し、社会の変化はまた必然に国の諸制度の改革を要求する。この要求に応じ切れない諸制度、この要求を拒否し、圧殺せんとする諸制度は、それ自らの矛盾に於て滅びさる」を引用して、人々の意識の成長によってこそ「人類の進化」がもたらされると語らせていることでもわかる。現代に生きる人間にとっては不可欠の視点ではなからうか。

ここでは「考二」の住む集落や、彼と関わる多くの人達が、厳しい環境の中で困難にぶつかりながらも、

団結して成長する姿が描かれている。集落の人々の日常生活を縦糸にし、消費組合の結成による生活の向上や、小作人の知恵と農民組合のたかかい、その基盤となる水平社運動がたくみに織り込れる。また、難波大助による皇太子狙撃の虎ノ門事件や幸徳秋水などに対する弾圧事件の裁判経過、日本の侵略に対して民族自決の行動を起こした朝鮮独立万歳事件など、新聞を引用して、その顛末を明らかにしながら当時の政治や情報伝達のしくみが詳しく述べられている。

今、「民主国家」と声高にいわれる現況と、この時代を重ね合わせることに、作家のおもいが込められているようにも想えた。

## 新着図書30選

## 〈総記〉

## ◆司馬遼太郎著

## 「風塵抄」(中央公論社)

世間ばなしのなかに「恒心」を語る珠寶の随想集。題の風塵というのは、いうまでもなく世間ということである。風塵抄とは、小間切れの世間ばなしと解してもらえればありがたい。なるべく、日常の、いわば身体髪膚に即したことを書こうと私かにきめたのだが、やがて内外に前代未聞の事件が相次いでおこり、日常に即してばかりもいられなくなった。

(「あとがき」より)

## 〈人文・社会〉

## ◆NHK取材班編

## 「大モンゴル 2」(角川書店)

チンギス・ハーンの死後、モンゴルを大帝国に育て上げた2代目大ハーン、オゴデイ。彼は、政治・経済体制を整備し、また新たな外征を企てた。十字軍に揺れるヨーロッパは、このモンゴルを知らなかった。そして一つの伝説が広まった。東方の救世主“プレスター・ジョン”の伝説である。モンゴルを読む、世界がわかる。(「帯」より)

◆K. スモーレン著, 小谷鶴次訳

「アウシュヴィッツの悲劇」(柳原書店)

「人類最大の悲劇」と世界中に言わしめたナチの残虐行為。強制収容所において、地獄を体験した人びとによる告発の記録。「帯」より

ニュルンベルグ国際軍事裁判所は「400万人以上のものがアウシュヴィッツで死んでいる」ことを明らかにした。(本書の一文より)

◆阿川弘之著

「井上成美」(新潮社)

海軍提督三部作(山本五十六、米内光政)の完結編。海軍兵学校の校長時代、英語廃止論を押し切った話には有名。その理由として「戦いは2年すれば敗ける。敗戦の日本の将来のため少年達の将来をちゃんと考えてやるため、最小限度の基礎教養だけは与えてやるのが、せめて我々の責務だ」と述べている。以後、次官として米内海相を補佐し、命をかけて終戦工作を続けた。戦後は子供に英語を教え、清貧な生活に甘んじた。

強く自己の信念を貫き通した生き様に強い感動を受けた。(有廣記)

<共通>

◆松岡清利編著

「ニューロコンピューティング」(朝倉書店)

洗濯機もクーラーもニューロの時代です。学習によって文字を認識する機械があります。障害物を回避することを学習するロボットがあります。いずれ試験の勉強をしてくれるロボットが生まれてきます。現在急速に成長している脳の働きをする機械を創る分野の一つの大学の9人のスタッフが解説している教科書です。(辻記)

◆斉藤駿編

「私の横っ面をはいた本100冊」(カタログハウス)

本書には各界を代表する100人の書きおろしによる100冊の「名著発掘」ともいふべき読書論が集められている。各人が、「もし、たった1冊といわれたら、私はこの本にするしかない」と思って選んだ1冊が、11項目に分類されており、一生に一度は読みたい本100冊、と受けとつてもよい。(日本教育新聞読書欄より)

◆共同通信社編

「水と生きる」(共通通信社)

世界の様々な土地で、様々な人々が水によって、水の中で、あるいは水と闘いながら生きている。水と戯れ、水に祈る人々もいる。そんな水と人との関わり合いのエピソードを本当に世界中から集めてまとめて1冊にした本。興味のある箇所の拾い読みでもOK。

(西名記)

<機械>

◆幡垣伸著

「花子をCADとして使う本」(ジャストシステム)

グラフィックソフトの「花子」で、図面を描くテクニックが解説されている。製図の基本編と実践活用編に分かれているが、実践活用編にある実例が面白く、かつ有用である。速さと正確さを必要とする図面での計算機の威力が、なるほどよく理解できる。計算機を活用する第一歩として、手にして欲しい本である。

(鍋本記)

◆副島啓義著

「電子線マイクロアナリシス」(日刊工業新聞社)

最表面層の化学分析や組成に対する機器の原理や取り扱い法について平易に解説されており、機械工学科に現有されているX線マイクロアナライザの取り扱いの入門書である。(灘野記)

◆吉川敏則著

「C言語実用数値処理プログラム集」(近代科学社)

パーソナルコンピュータの利用者を対象に、現在脚光を浴びているC言語による数値処理プログラム例を豊富に掲載したライブラリ集である。プログラムはすべてMS-C Ver.4.0を前提に書かれているが、汎用の計算機へも容易に変更できる。単なるプログラム集としてではなく、計算機を十分に理解する手段として、あるいはプログラムを作成する際に活用できる書である。(野原記)

## ◆須藤巨啓著

「機械の設計考え方・解き方 1・2」

(東京電機大学出版局)

機械装置を設計するには、構成する部分を組み立てる締結要素や動力を伝えるための伝動要素など、いわゆる機械要素の設計ができなければならない。

本書は機械の設計の基礎事項について、例題を解きながら、その考え方、計算方法などを理解させる。

(河口記)

## ◆宮崎誠一著

「パソコンで学ぶ自動制御の応用学」(CQ 出版社)

デジタル制御におけるPID制御を中心に、その具体例としてDCモータの制御、高度なアドバンスト制御(サンプリングPI制御、カスケード制御)、新しい制御技術であるファジー制御について述べている。よくある理論のみの本と異なり、実際の経験にもとづいて書いてあるので、具体的なイメージをつかみやすい。

(藤田記)

## ◆石田義久・鎌田弘之著

「デジタル制御のポイント」(産業図書)

デジタル制御における現代制御理論にもとづく設計法が簡潔にわかりやすくまとめられている。又、C言語によるマトリックス演算を中心とした具体的なプログラムがのっているので、プログラムを自分で入れてみていろいろと実際にやってみれば更に理解を深めることができるだろう。

(藤田記)

## ◆末澤芳文著

「先端機械工作法」(共立出版)

NC加工をはじめ、ファインセラミックス・複合材料の加工など、先端の機械工作法について詳しく説明している。また、航空機の工作法についても解説している。

(河野記)

## 〈土 木〉

## ◆中野坦〔ほか〕著

「新版土質工学」(コロナ社)

約23年前に高専生を対象として著者らがまとめられた本をもとに、最近の研究成果も取り入れ、分かりやすくまとめられている。土粒子の微視的な働きや、塑性論の立場から見た粘土構造など他の本ではあまり深くふれない所にもページを割り説明されている。高専生には丁度レベル的にも合っている。

(石井記)

## ◆経済調査会編

「ふるさと土木史」(経済調査会)

日本の土木技術は、明治時代に欧米技術の輸入から始まり、その後100年間に飛躍的な発展をし今日では欧米を凌ぐものがある。全国47都道府県の土木構造物や工法などの100年間の変遷をエピソードもまじえ興味深くまとめられている。写真や図をながめるだけでも楽しく人類の偉大さ、明治、大正時代の日本の土木技術者のスケールの大きさ、土木技術が文明の進歩に

(石井記)

## ◆日本測量協会編

「サーベイ・ハイテク70選」(日本測量協会)

高精度化・高速化・自動化をめざす近代測量。

測地・地形測量・デジタルマップ・写真測量・海の測量・リモートセンシング・調査の8分野において画期的な性能を有する、機器・技術・システム等について、図版・写真を多用してわかりやすく解説されている。

(阿部記)

## ◆土質工学会編

「土質工学用語辞典」(土質工学会)

この用語辞典により土質工学の基本的用語を端的に理解することが出来る。又、多くの図表を用いられているために視覚的にも知識を得る事が出来る。また採録された用語は約4,200語と学会制定用語の約4倍の多きに及んでいる。又、他にも英和、独和等の用語索引があり、英文、独文の和訳にも大いに役立つ。

(小堀記)

◆諸戸靖史著

「土質工学基礎演習」(森北出版)

土木工学の専門科目の中でも土質工学は他の科目と比較して、理解しにくい科目と言われている。工学科目はいずれの場合も演習を解く事により理解が得られやすい。この演習書は初心者にも基礎理論が無理なくマスターできるように親切な説明がなされている。基本から応用まで幅広く、多くの問題があるのも特徴だ。

(小堀記)

〈建 築〉

◆高橋志保彦著

「都市環境のデザインー空間想像の実践ー」

(プロセスアーキテクチャ)

21世紀を間近に控えますますます変貌していく都市空間、そのデザインをどう考えるべきか、というテーマで、建築物を直接対象とするのではなく、広場や公園、モール等の外部空間の具体例を紹介している。著名な建築家やプランナーと著者との議論も興味深い。写真も豊富に掲載されているので見るだけでも楽しめる。

(西名記)

◆船越徹〔ほか〕著

「茶室空間入門」(彰国社)

本書は日本の伝統的建築空間である茶室空間を写真や図版を使ってわかりやすくまとめた本である。

「茶の湯の歴史」「茶会が茶室でどの様に行われるか」「茶室空間のもつ演出方法」「茶室と現代建築との関係」などを述べている。

(篠部記)

◆柏木博著

「デザイン都市」(INAX)

本書は、日用品・建築・都市などデザインが、20世紀前半に展開されたモダニズムのデザイン理念から21世紀にむけてどの様に展開していくのであろうか、を近年の経済・文化のデザインの潮流から探ろうとした本である。

(篠部記)

科学・数学パズル

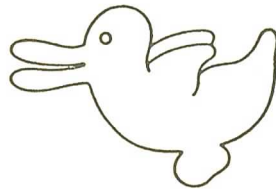
1. 次の覆面算式の解答をしなさい。

郷に入れば、郷に従え

$$\begin{array}{r} \text{WHEN} \\ \text{I N} \\ \text{ROME} \\ \text{BE} \\ + \quad \text{A} \\ \hline \text{ROMAN} \end{array}$$

2. 次の絵は、アヒルです。

よく見ると、もうひとつ動物がいます。さて、それは何でしょうか。



抽選により正解者2名に、テレホンカードを進呈します。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「貸出期間を守ろう」

○「図書室では飲食はやめよう」



# 図書館の土曜日開館に関するアンケートについて

## A) 目的

図書館では、学校週5日制にかかわらず学生の学習を助ける目的で予算措置をし、土曜日の開館を実施しています。しかしながら、利用状況があまり良くありません。そこで学生の利用環境や意見を把握し今後の運営上の参考とすることを目的としてアンケートが実施されました。

## B) 図書館の土曜日開館に関するアンケート結果

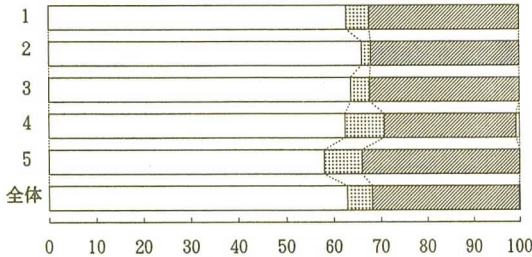
### 1) アンケート結果数

	回収率(%)					
1	100	93	100	95	97	
2	98	95	88	100	95	
3	100	79	93	37	77	
4	84	90	91	90	88	
5	98	81	47	62	72	
全体	96	88	84	77	86	

### 2) 通学状況 (学年別集計)

- (1) 自宅
- (2) 下宿
- (3) 学寮
- (4) 無回答

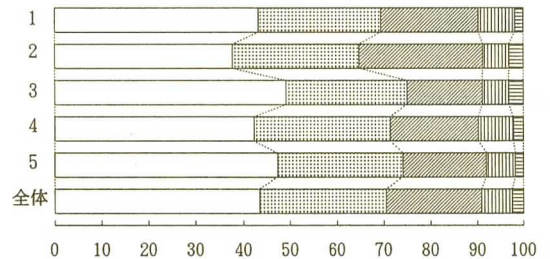
通学状況 (学年別集計) 百分率グラフ



### 3) 通学に要する時間 (片道)

- (1) 30分未満
- (2) 30～60分未満
- (3) 60～90分未満
- (4) 90～120分未満
- (5) 120分以上

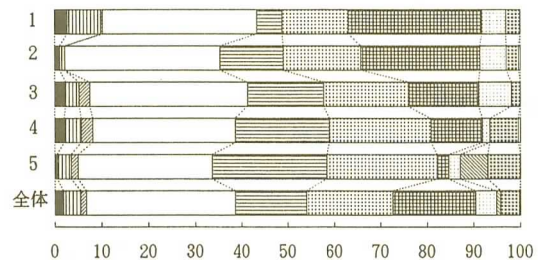
通学に要する時間 (学年別集計) 百分率グラフ



### 4) 土曜日の過ごし方について (主なもの2つまで)

- (1) 図書館を利用する
- (2) 自宅で予習・復習などの学習をする
- (3) ボランティア活動・地域活動をする
- (4) 家や寮でのんびり過ごす
- (5) アルバイトをする
- (6) 自分の趣味のことにする
- (7) クラブ活動をする
- (8) 帰省する
- (9) 卒研をする
- (10) その他 ( )
- (1) 無回答

土曜日の過ごし方 (学年別集計) 百分率グラフ

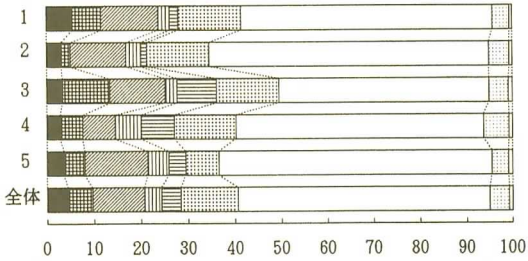


◎ 学校週5日制の趣旨は、「自ら学び、考え、行動する能力の育成」のための時間を確保し、学生が家庭や地域社会で主体的な行動や役割を果たすことにある。

5) 土曜日の図書館利用について

- (1) ほとんど毎週
- ▨ (2) 隔週
- ▧ (3) 月に1度
- ▩ (4) 2月に1度
- ▨ (5) 3月に1度
- ▩ (6) 試験期間のみ
- (7) 利用しない
- ▨ (8) その他 ( )
- (9) 無回答

土曜日の図書館利用 (学年別集計) 百分率グラフ

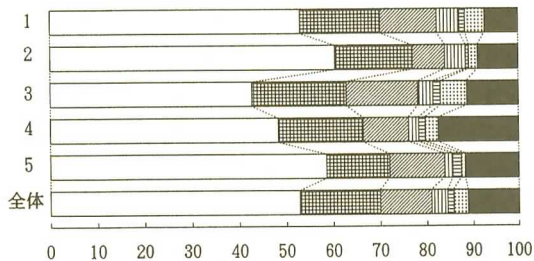


◎ 学生の50%が、土曜日に図書館を利用したことがない。

6) 土曜日の図書館利用時間数について

- (1) 0
- ▨ (2) 1時間未満
- ▧ (3) 1～2時間未満
- ▩ (4) 2～3時間未満
- ▨ (5) 3～4時間未満
- ▩ (6) 4時間以上
- (7) 矛盾・無回答

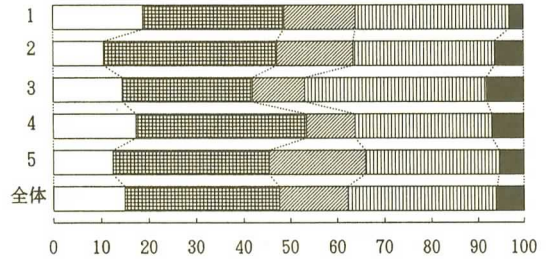
土曜日の図書館利用時間数 (学年別集計) 百分率グラフ



7) 土曜日の図書館の開く時間帯について

- (1) 9時から14時30分がよい
- ▨ (2) 10時 (現在) から15時30分がよい
- ▧ (3) 11時から16時30分がよい
- ▩ (4) 11時30分から17時がよい
- (5) 無回答、その他

土曜日の図書館の開く時間帯 (学年別集計) 百分率グラフ

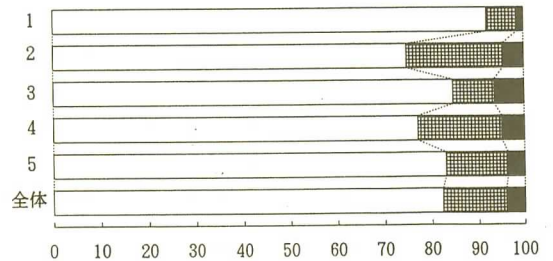


◎ 現状のままで良いとする意見と11時30分からの良いとする意見に別れているが、現在の開館時間について変更をしないで、しばらくこのままとします。

8) 土曜日の図書館が開館している時間数について

- (1) 現在のままの5時間半でよい
- ▨ (2) もう少し短くしてもよい
- (3) 無回答、その他

土曜日の図書館が開館している時間数 (学年別集計) 百分率グラフ



◎ 全体のまとめとしては、通学時間が30分以内で土曜日をのんびり過ごしていると回答した学生(23%程度)を図書館の潜在的な利用者として捉え、学校週5日制の趣旨を尊重しつつ図書館の利用を促進する必要があると思われる。



## 図書館のおもな業務報告

図書館のサービスや業務を広く広報することが求められている。また、情報・通信に関する科学・技術の発達等による図書館をめぐる環境の急速な変化への対応として、図書館は何をしようとしているのかを理解していただくために、この1年を振り返り業務報告をします。

1. 学校週5日制及び教職員週休2日制実施に伴う土曜日開館の実施 (1992.5.1)
2. 広島県大学図書館協議会への加盟 (1992.6.30)
3. 平成4年度中国地区高等専門学校図書館長会議の開催 (1992.11.19)
4. 図書館自己点検・評価「図書館白書」作成予定
5. 図書館の有効利用座談会・土曜日の利用に関するアンケート実施 (1992.7.15, 11.20)
6. 図書館業務整備計画 (図書委員会, 図書館運営委員会1992.12.17, 総務委員会1993.1.8)
  - (1) 文献複写の取扱い (1993.4.1から実施予定)
  - (2) 図書館の学外公開 (1993.4.1から実施予定)
  - (3) CD-ROM、フロッピディスク形態図書資料の利用および日本科学技術情報センターのオンライン情報検索サービスの利用のためのパソコン導入計画 (1993.4.1から一部実施予定)
  - (4) ビデオ資料及び装置の段階的整備計画
  - (5) 学術情報センター対応図書館業務電算化計画
7. 学生等の読書・学習・文献調査関連
  - (1) 「求める情報へのアクセスー研究・調査・学習のための図書館利用法ー」(案) pp. 29作成
  - (2) 「呉工業高等専門学校図書館概要」の作成
  - (3) 読書の推進のための読書・思考テーマの隔週設定

図書館の業務整備計画については、順次その実施に向かっています。

なお、実施内容の詳細については、改めてお知らせします。

## 編集後記

本年の日本列島は、皇太子妃決定のお芽出たいニュースで幕を開けました。一昨年来明るい話題を待ち望んでいた全国民を大喜びさせています。

本校図書館でも、学生諸君が楽しく、有意義な学生生活を送ることができるよう、色々と改善に取り組んでおります。その一例を紹介しますと、皆さんからの購入希望図書を迅速に備えられるように、本年から当該予算も組みました。皆さん、奮って本制度を活用し、読書を楽しんで下さい。

また、本号が、今春卒業の諸君、諸嬢に最高のプレゼントとなるよう表紙に田邊先生のスケッチ「呉市立美術館」を掲載頂きました。ご鑑賞ください。

(図書館長補 池上廉平)